

# 魔法のダイアリー プロジェクト 活動報告書

報告者氏名:高木啓吾

所属:香川県立善通寺養護学校

記録日: H31年 2月 1日

キーワード:

## 【対象児の情報】

- 学年** 中学部3年生
- 障害名** ヌーナン症候群
- 障害と困難の内容**
  - ・つかまり立ちやつたい歩きはできるが、日常生活は車椅子を使用している。
  - ・上肢は微細な動きはできないが、スイッチを押したり、手を伸ばしたりすることはできる。
  - ・1語文の表出（アンパンマン、おしまい など）はあるが、機能的な表出はあまり見られない。
  - ・身近な教師や物の名前は理解できているようである。

## 【活動目的】

- 当初のねらい**
  - ・コミュニケーションの実態を探り、周囲と上手に関わる方法を探る。
  - ・支援者間で対象生徒のコミュニケーションの実態について理解を深める。
- 実施期間** H30. 5～H31. 3
- 実施者** 高木啓吾
- 実施者と対象児の関係** 担任

## 【活動内容と対象児の変化】

### •対象児の事前の状況

- ・日々の生活のなかで、何かを要求しているのではないだろうか、活動を拒否しているのではないだろうかと思われる行動や発声があった。しかし、いずれもぼんやりとしたもので、対象生徒のコミュニケーションの実態を十分につかめていなかった。
- ・視機能や聴覚は基本的に問題がない。
- ・動画を見たり音楽や絵本の読み聞かせを聞いたりすることは好きである。
- ・初めての場所や初めて経験すること、服を着ることは苦手で大声を出して避けようとすることがある。
- ・暑さや寒さは苦手である。



【学習の様子】

### •活動の具体的内容

#### 実践①

対象生徒がどのようにコミュニケーションを図ろうとしているのか、そして教師はどのように受け止めているのかを把握するためコミュニケーションサンプルの記録と分析を行った。

- 実施者** 担任／副担任
- 実施期間** 平成30年7月9日（月）～平成30年7月11日（水）
- 実施方法** 学習している教室の隅にビデオカメラを設置し、対象生徒の様子を撮影した。その記録を基に実施者が、コミュニケーションサンプルの記録表に、内容、機能、相手などを書き込み、グラフ化し、下位項目も含め一致度の算出を行い、比較、分析を行なった。
- 実施者である担任を教師1、副担任を教師2と表記する。

※活動全てを対象としたが、一部教室移動と10日（火）の2時間目に行われた水泳学習は記録できていない。

・記録したサンプルは教師1が112、教師2が121であった。  
 そのうち同じ行動をカウントしている71サンプルを分析の対象とした。

記録表

子どもの名前 記録日		コミュニケーションサンプルNo.						
子どもの名前	記録日	機能	相手	場所	手段	時間	備考	

	総サンプル数	分析対象サンプル数	対象サンプル数の割合 (%)
教師 1	112	71	63.4
教師 2	121	71	58.7

・機能、相手、場所、手段について、教師1と教師2が記録したサンプルの内、共通したものを集計し、グラフ化した。またそれぞれの項目及び下位項目について一致度を算出した。

結果・考察

●機能（教師2の記録に1箇所未記入あり）

	要求	注意喚起	拒否	その他
機能	33	3	17	0

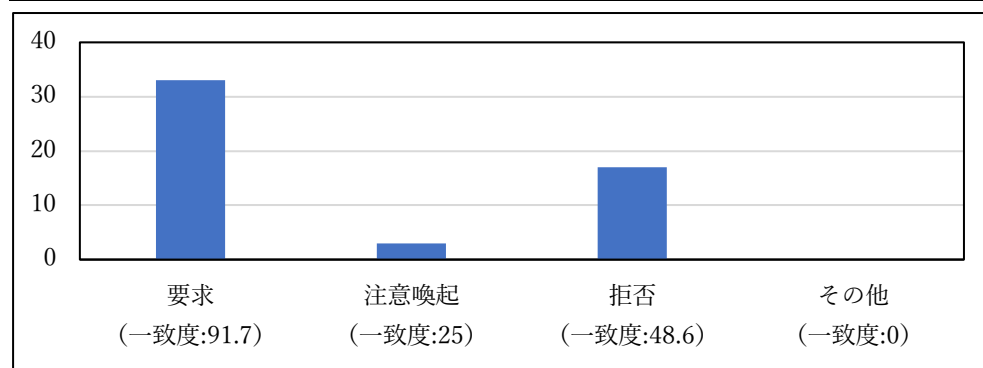


図 1. コミュニケーションの機能 (一致度:74.6)

●場所

	201 教室	204 教室	学習室	自立活動室	音楽室
場所	37	3	15	10	6

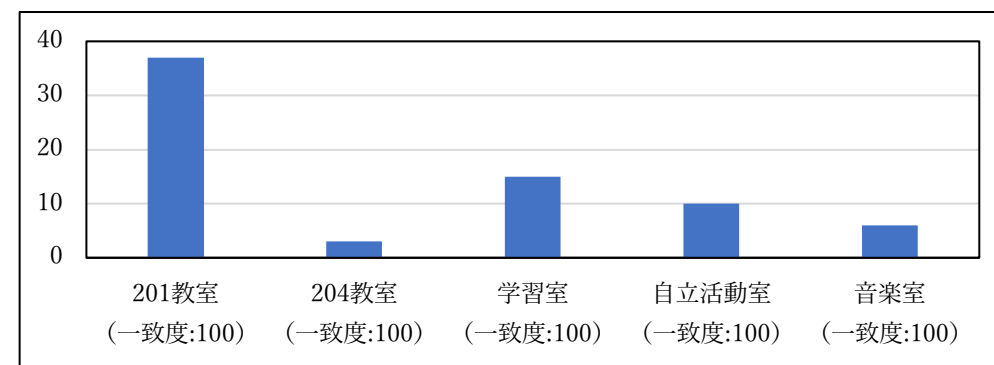


図 2. コミュニケーションの場所 (一致度:100)

●相手

	教師 A (教師 1)	教師 B (教師 2)	教師 C	教師 D	教師 E	教師 F	教師 G	生徒	その他
相手	16	2	10	8	4	7	10	3	0

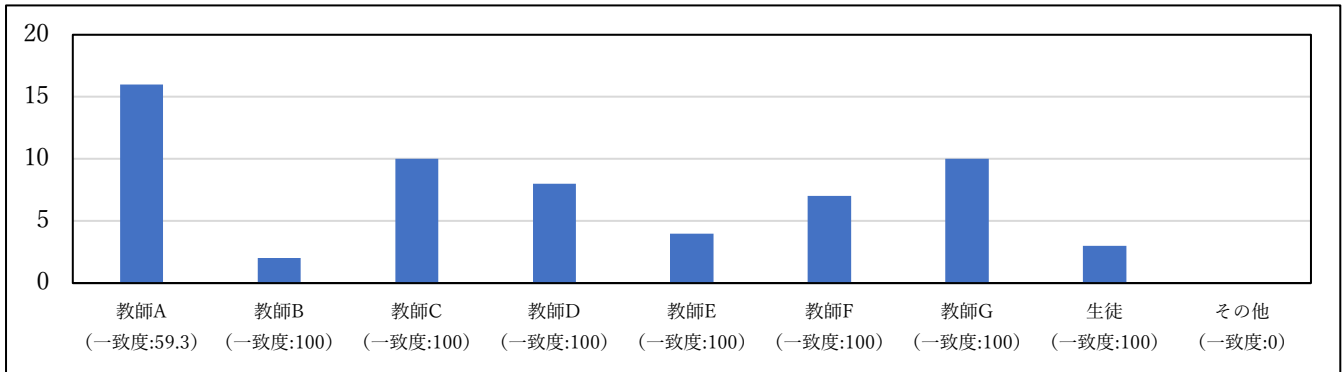


図 3 .コミュニケーションの相手 (一致度:84.5)

●手段 (一つのサンプルに二つの手段の記述あり)

	行動 (直接)	行動 (間接)	行動 (その他)	声
手段	11	31	5	22

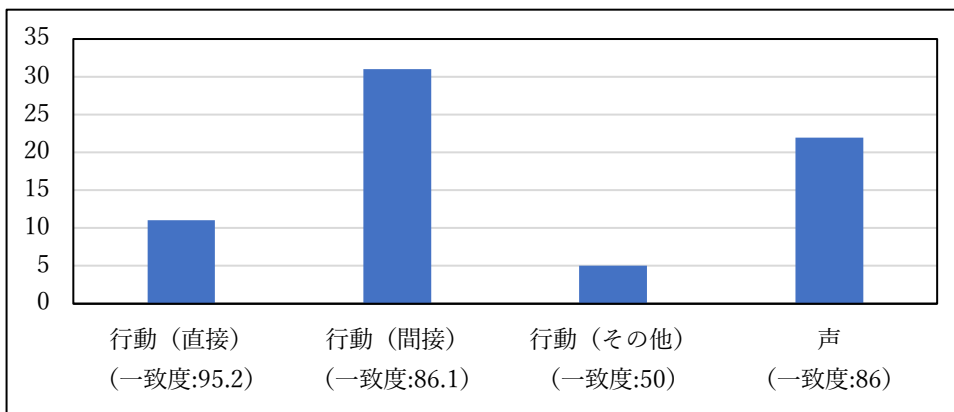


図 4 コミュニケーションの手段 (一致度:94.7)

・何らかの発信はしたと思われるが、誰にしたのか、また要求の対象は何かといったことが不明確なことも多々あり、機能や相手に対して暫定的にこうだろうとみなしたものが多くあった。

図 1 より

- ・機能全体の一致度は 74.6%で他の項目よりも低く、二人の教師が解釈に困る場面が多かった。
- ・機能の下位項目における一致度は、要求が 91.7%で比較的高い。また要求が占める割合が 6 割を超えている。
- ・注意喚起の一致度が 25%で低い。
- ・拒否の一致度が 48.6%で 2 回に 1 回は解釈が異なっている。
- ・注意喚起と拒否の項目で一致度が低いのは何度も出現した「あー。」などの大きな声を出したり、机を押したりしたものが記録者間で解釈が異なったからだと考えられる。
- ・注意喚起、拒否の区別が教師にはわかりづらく、支援者の想像で関わりが展開していたことが度々あったのではないだろうか。

・ 絵本やお茶などは概ねいつも同じ場所に置いてあり、本人の慣れた方法でできる要求は、教員にとっては意図を理解しやすい表出になる。そのことが、要求の一致度が拒否や注意喚起の一致度より高い要因の一つではないだろうか。そして本人にとっては要求を出すことが周囲に意志を伝えるための確実性の高い方法となっている。

・ 要求と注意喚起、拒否と注意喚起が分離できていない可能性がある。

#### 機能において解釈が別れた例

・ 総合的な学習の時間において車椅子ごと揺らした行動を教師1は活動への拒否と評価したが教師2は注意喚起とみなした。

・ 日常生活の指導の際、友達の髪を引っ張った行動を教師1は拒否と評価したが教師2は要求とみなした。

#### 図2より

・ 場所については同じ行動に対するすべてのサンプルにおいて教師間で解釈が異なることはなかった。

※201 教室はホームルーム教室であり、個人の荷物や生徒に応じた教材が置かれている。

#### 図3より

・ 相手についてはほぼ一致度が100%だったが、教師A（教師1）については値が低かった。

・ 担任である教師A（教師1）と学習することが多いが、教師1は自分に表出したと捉えたが教師2は全体に向けてまたは相手不明としているといった場面が何度もあり、それが「相手」の項目の教師A（教師1）の一致率が低い原因になった。具体的には学習室での授業の際、対象生徒が大きな声で「あー。」と叫んだのを教師1は自分に言ったと判断したが、教師2は相手が不明で判断がつかないとしたサンプルがあった。

#### 図4より

・ 手段については間接行動が最も多い。

例：（絵本を読んで欲しいときに）絵本のある方向に手を伸ばす。

・ 直接行動よりも間接行動や声の一致度は低い。

・ 音声は「おしまい。」や「あー。」といった大きな声など種類が限られている。

・ 大きな声を出しながら行動をするといったような場面で記録の揺らぎが発生した可能性がある。

※黄色のマーカ―は本人の困りにつながる解釈、水色のマーカ―は困りの解決につながる解釈

#### 結果・考察を踏まえての見立て

・ 対象生徒の表出のなかには、対象が明らかな要求があったり、同じ場面で大きな声を何度も出したりしたことがあった。そのことから、本人は伝えたいことや思いがあり、それを何度も発信している。しかし機能において一致度が低い項目があることを考えると、要求と注意喚起や拒否と注意喚起といった機能をしっかり分けて使えていない。そのため受け取る側も意図や願いを正確に受け止められず、結果的に生徒自身の混乱やいらいらが高まり、大きな声を出したり、友達の髪を引っ張ったりすることでしか、分かってほしいと言う気持ちを表現する方法がなかったかもしれない。対象生徒にとってそれは大きな困りになっているのではないだろうか。この困りを少しでも解消することが、周りに分かりやすいコミュニケーション能力が身に付き、もっと周囲と上手に付き合えるのではないだろうか。

### 実践②-1 『要求を出しやすい環境を整える』

・実施期間 平成30年9月～

何か要求があるときは手を伸ばして伝えることがあったが、何を要求しているのかわからない場面があったため、DVDプレーヤーと絵本を1メートル弱離して配置し、生徒が好きな活動であるDVDの視聴と絵本の読み聞かせの活動を、手を伸ばして明確に選ぶことができるようにした。



〈教室右前方に常時設置〉



〈右手を伸ばして選ぶ〉

・DVDのソフトや絵本は保護者からの聞き取りで、生徒が興味のあるものや好きだと思われるものを中心に選んだ。

→・DVDプレーヤーが充電中で教室後方のロッカーの上に置いてあった際は、体をひねって、そちらに向けて手を伸ばす姿も見られた。

・DVDが一時停止された時などに、先生を呼んで、先生が来たら、手を伸ばして要求することができた。

### 実践②-2 『何をしたいかを伝える』

・大きな声が出るなど、気持ちが不安定な時に、代替の活動となる絵カードを提示して選んだ。

・「お茶を飲む」「散歩に行く」の二種類を用意した。

・選んだ際には授業中でも、お茶を飲むまたは教室を出て数分廊下を散歩し、また授業に戻った。



〈印刷した用紙を薄い発泡スチロールの板に貼って作成〉



〈触れることで選択〉

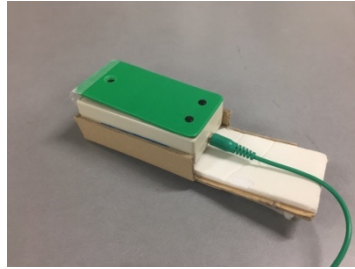
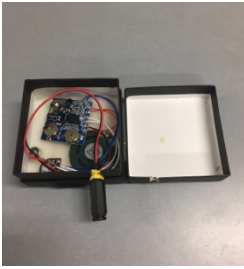
→・大きな声が出たら、すぐに絵カードを選び、別の活動に移ることで、落ち着いて、活動に戻ることができていた。

・今まではお茶を飲むときは定時にコップ一杯飲むことにしていたが、絵カードを選び、お茶のお代わりを要求する場面が見られた。

### 実践②-3 『誰かを呼ぶ方法を身に付ける』

・要求がある際、先生を呼ぶことができるように、小さなスピーカーとスイッチを接続し、車椅子に取り付けた。

・「先生」の音声を録音し、生徒が押した際に教師が生徒の正面に立ち、反応を伺う。



#### 使用機器

- ・BDアダプター10、30秒ボイスレコーダー、プレートスイッチ

→・休み時間などに、スイッチを押して、教師を呼び、その上でDVDや絵本に手を伸ばして、やりたい活動を伝える場面が多く見られた。

- ・教師を呼び、反応したが、特に手を伸ばさないこともあった。そのようなときは実践②-2で用いた絵カードを示すとお茶を選ぶという場面もあった。
- ・注意喚起と要求が分離して発信する場面が増えてきた。
- ・スイッチ自体が気になり、剥がそうとする場面もしばしば見られた。
- ・伝えたい気持ちは様々であると思われるが、自ら発信する場面が増加した。

#### ・対象児の事後の変化

- ・大きな声を出したり、頭を叩いたりする場面はあまり見られなくなった。
- ・衣服を脱いだり、投げたりすることは現在でもしばしば見られる。
- ・担任が対象生徒を褒めたときに、少し離れた他の先生の方に向かって手を伸ばすことがあった。担任よりもその先生に褒められたかったのかもしれない。

#### 【報告者の気づきとエビデンス】

##### ・主観的気づき

- ・コミュニケーションの環境を整えたり、手段を増やしたりすることによって、表出の機能がわかりやすくなった。
- ・今までは、生徒がわかりやすい注意喚起の方法が身に付いておらず、机の上にあるものを落としたり、「おしまい。」と言ったりした場合、注意喚起か拒否か判然としなかった。教師としては生徒がある程度スイッチを用いた注意喚起が身に付きつつある状況にあったので、上記のような行動を拒否なのではないかと考えた。
- ・相手や手段もより明確化され、周囲の人に伝わりやすいコミュニケーション手段になった。
- ・手を伸ばす行為は、対象物がはっきりしていない場合、本当に何かを要求しているのだろうかといった迷いがあった。どのような意図か、依然としてはっきりとわからない場面もあるが、絵本などに向けて手を伸ばした場合は、その後絵本を読むとじっと見たり、中断すると再び手を伸ばしたりする様子から、教師としては要求と判断した。

##### ・エビデンス(具体的数値など)

7月に実施したコミュニケーションサンプルを再び実施

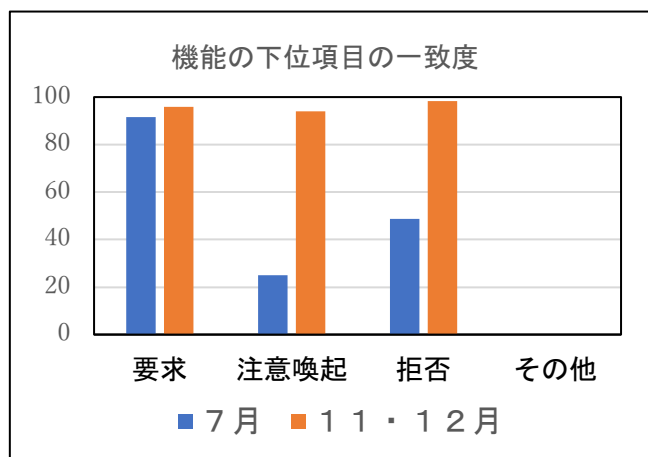
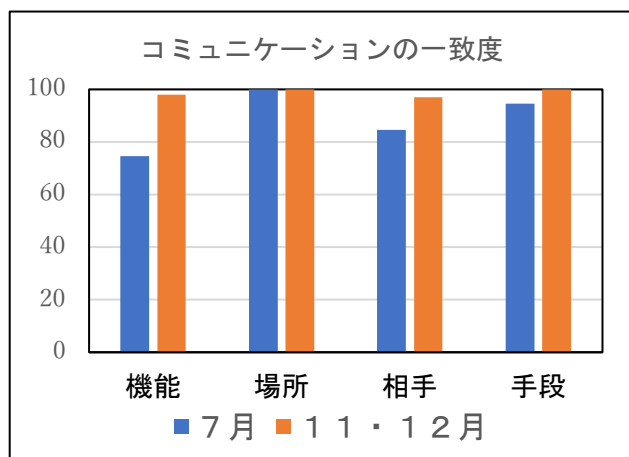
- ・実施者 担任／副担任
- ・実施期間 平成30年11月26日(月)、28日(水)、12月2日(火)
- ・分析対象サンプル数 200

## 結果

項目	機能	場所	相手	手段
一致度 (%)	98	100	97	100

機能の下位項目	要求	注意喚起	拒否	その他
一致度 (%)	96	94.1	98.4	0

### 7月と11・12月のコミュニケーション及び機能の下位項目の一致度の変化



・コミュニケーション場面の設定により、要求や注意喚起を出しやすくなったこともあり、サンプル数自体が大幅に増えた。

・機能についての一致度が大幅に増え、下位項目の中でも特に、注意喚起と拒否の一致度が大幅に増加した。  
 ・スイッチを押すことで注意喚起の手段が身に付き、「注意喚起」→「要求」のコミュニケーションの流れに気付いたことやそのスイッチが気になり剥がそうとしたことがコミュニケーション増加やわかりやすいコミュニケーションの変化の一因ではないかと考えられる。

### ・その他エピソード(画像などを含めて)

・休み時間などにDVDに向けて、手を伸ばすことによって、今何がしたいかを明確に示すことができた。また、絵本を読んでいる最中に、DVDプレーヤーに向けて手を伸ばすこともあり、活動途中でも、「やっぱり、あっちがいい。」といった気持ちを表出できたのではないだろうか。

・保護者に実践内容を説明。

#### 保護者より

「そもそも先生の間で、コミュニケーションの意図の理解が異なることに驚いた。少しでも周囲にとってわかりやすく伝えられたらいいですね。」といった言葉をいただいた。

・生徒が入院している病棟での情報交換会にて実践の概要を説明。

#### 看護師長より

「日々の成長は本当に小さいが、丁寧に関わることが大切だと感じた。また、選択させるということは病棟でも一部取り入れているが、学校での取り組みも参考にしていきたい。」といった言葉をいただいた。



〈病棟との情報交換会の様子〉